



宇和島は、海と山が私たちのすぐそばにあり、自然に恵まれた豊かな暮らしや、気候と地形を生かした産業で発展してきました。かんきつや魚、真珠などをはじめとした産業だけでなく、伊達家の治政に始まる歴史から独自の文化を育んできたまちです。

いつしか当たり前前にそばにあった豊かな毎日の中で、自分たちを支えているたくさんのコトやモノについて、つい忘れてしまいがちです。しかし、私たちの暮らしをひとりひとりの力で継続していくことは、簡単なことではありません。

平成30年7月豪雨災害から4年が経つ今、私たちの暮らしにはどんな変化があったのか。復興のこれまでとこれからについて特集します。

特集「地域の未来を育む」



景色を、もう一度

ミカンの木の背景に広がる海は、「宇和島百景」にも認定されている自然豊かな宇和島らしい景色です。先人たちが築いてきたかんきつ産業が広がる吉田町などでは、日常の景色として目にすることが多かったのではないのでしょうか。

平成30年7月豪雨災害は、そんな日常の光景を一変させました。多くの園地を崩落させ、その濁流と土砂が次々と広がっていきました。避難が間に合わず、道路が寸断され孤立してしまった人たちもいました。さまざまな救助や支援助物を届けるためにもまずは経路の確保が必要でした。

その活動に真っ先に取り組んだのが、吉田建設業協会の皆さんです。自身も自宅が被災している中で、まずは地域のために自分たちができることからしようと、道路を一車線でも確保するという

想いで行動したと当時を振り返ります。人が入ることができなければ、物資や支援を届けることができません。懸命に作ったなんとか通ることのできる1つの道から自衛隊やボランティアなどが入ることができ、復旧に向けた作業が始まりました。そこから、地域が丸となって少しずつ復旧に取り組み、徐々に日常を取り戻してきています。

しかし、現在も進む復旧工事には、園地の急斜面など作業が思うように進まない手の届かない場所もあるといえます。作業は、機械などが入れない場所です。人手不足が深刻な問題となっています。地域としてもこれからを担っていく若い世代が少なくなってきたり、危機感があり、解決方法を考えていくことが求められています。



防災意識を創る

復興を進めていく過程で防災を学ぶことも大事な要素の一つです。地域の人たちが少しずつその基盤を作り、子どもたちにも伝えていっています。

6月号で紹介した特定非営利活動法人宇和島NPOセンター主催の「ブラ防さんぽ」に吉田中学校の生徒たちが参加していました。参加した生徒たちは真剣な面持ちで自分たちのまちを歩きながら歴史とともに防災について学んでいました。また彼らは発災当時小学生で、自宅が被災した子もいるかもしれませんが、自らの身を守ることを学ぶことは、簡単なことではありませんが、少しずつでも意識の芽を育てることが、地域全体の防災を高めることに繋がっていきます。

奥南小学校では、令和3年に児童が校区の防災マップを制作し、コンクールで賞を受賞しました。自分たち歩いて危険な場所や避難時に使えるようなものを調べたり、地元消防団の人に話を聞いたりしたことを書き込んだ手作りのマップです。奥南小学校だけでなく、発災前から防災マップで蔭瀨小学校が4年連続入選、三浦小学校もコンクールで賞を取るなど、子どもたちの災害に備えた意識は着実に育っています。





ほかにもうわじまグラランマが開催する子ども食堂では、近隣の人が集まって、さまざまな交流を行っています。子どもたちが防災ゲームを使って、身近にあるものから自分の身を守る方法を積極的に学ぶ場をつくり、その隣では大人の困りごと相談も行っています。子どもたちの居場所づくりだけでなく、その家族や地域にとっての居場所をつくるために、地域の課題を共有していくことでみんなが少しずつ助け合っていく関係を作っています。

訪れた日は、子ども食堂に参加していた人たちが自分たちも盛り上げたいと協力して、1つのブースを作っていました。子どもたちも内容を一緒に考え、来た人たちに明るく説明していました。子どもたちの元気な姿を大人たちが見守り、支える様子は、災害やコロナ禍で失われかけていた家族や地域のきずなを思い出させ、会場を温かい雰囲気包んでいました。

こうした取り組みは、すぐに結果が出るものではありません。ですが、少しずつでも地道に積み重ねていくことで、子どもと大人がお互いに助け合い、地域を知り、人を知ることにつながり、災害に負けない強い基盤となっていくます。



一人ひとりの、笑顔が光る場所へ。









復興の芽を育てる

復興を願って植えたミカンの木が育つように、これまでの取り組みも少しずつ着実に育ってきています。被災した園地や道路も少しずつ景色を取り戻してきているように感じますが、土のうで応急処置をして手つかずの状態で残されている園地も数多くあります。

今回紹介したことは、それぞれの地域で行われていることの一部です。話を聞いたみなさんは

「まだまだこれからやることはたくさんある。学校の統廃合や高齢者の独り暮らしの増加など、地域が無くなってしまふ不安が常にある」と話します。この地域の暮らしを、自分たちの未来を育てていくのは他でもない私たちです。ボランティアや企業などの支援を受けながら、地域が一体となって少しずつ前に進み続けてきた私たちの復興への

歩みは、たとえ、その成果がすぐに表れるものではなくても、これからも止めることなく、進めたいかなくははいけません。

これまで地域を支えてきた大人たちも、未来を担う子どもたちと共に、手を取り合いながら自分たちのやれることをやっていきましょう。育てた復興の芽が花開き、実を結ぶことを願って—。